



展望

本学の今後を見据えて

学長 鈴木 志津枝



2014年度を振り返ると、青色LED発明で日本人3名がノーベル賞に輝いたことや若いアスリートの活躍といった明るい話題がありましたが、一方では、日本の様々な地域で台風や地震、火山の噴火など自然

の脅威を示す災害が相次いだ年でもありました。

神戸市看護大学は、1995年1月の阪神淡路大震災の翌年である1996年4月に開学し、2015年の今年、開学20年目という節目の年を迎えています。この間、2000名近い優秀な卒業生や助産学専攻科修了生、大学院修了生を社会に輩出し、看護界だけでなく地域にも貢献してまいりました。近年、わが国の医療・看護を取り巻く社会環境は大きく変わりつつあります。今日の少子高齢社会の進展を基盤に、看護専門職者の育成や社会貢献に対する社会の要請はますます強くなっています。

こうした背景を踏まえ、本学はさらなる発展を目指して大学改革を進めつつあります。2014年度からは、学部教育に関しては、全卒業生が地域住民の暮らしを理解するために、これま

で培ってきた地域貢献活動を教育課程に組み入れ、地域住民の方々に模擬患者や語り手、健康測定参加者として協力していただく『コラボ教育』の実施、継続看護や訪問看護の教育の強化、シミュレーターを活用した教育の充実、学生表彰制度の導入、キャリア支援センターの開設準備など、学部学生や編入学生の入学から卒業、就職までの責任ある教育体制の実現に向けてさまざまな取組を行っています。また、大学院の重点化にともなう組織改革として助産学専攻科の大学院化に向けた検討、大学院カリキュラムの充実として教育学や英語プレゼンテーション論の配置、専門看護師教育科目の充実を進めています。

2016年には、本学は開学20周年を迎えます。卒業生の皆様には、学部教育や大学院教育、後輩の教育に大きな貢献を果たしていただいておりますが、次世代に向けてさらに飛躍をしていくために、本学と卒業生との絆の強化に努めていきたいと考えています。

神戸市看護大学は教職員の叡智を結集して、さらに発展できるよう努力してまいりますので、今後ともご支援のほどをよろしくお願いいたします。

事務局長室から 一日々雑感

事務局長 森田 文明



看護大学に着任してまもなく2年になる。この間、COC事業の採択やそれに伴う地域連携教育・研究センターの設置、ホームページのリニューアル、シミュレーションラボの整備、須磨区や神戸市民病院機構等との連携

協定の締結、大学院専門看護師コースの改定など、目まぐるしく変化する大学環境に対応すべく、日々何かに追われるような気持ちで先生方の活動の裏方として取り組んできた。

これまで医療・介護行政に長く携わってきたから、この世界の変化の速さは心得ていたつもりであるが、学外から求められる課題やよりよい大学を目指して取り組むべき課題はまだ多い。

地域に1人でも多くの優秀な看護師を輩出したいという先生方の熱い思いが伝わってくるので、それに応えるべく事務局も目の前の課題に追われることになるが、時として課題克服のための手段そのものが自分の仕事の中で目的化しているのではないかと感じる時がある。

「手段の目的化」とは元来、経営用語であったと思うが、あらゆる組織運営に通じる落とし穴である。何か目的を持ってそのための手段の実現に取り組んでいるはずが、いつの間にか手段を実現させること自体が目的と化し、本来の目的が見えなくなってくることを指す。

年数を経て価値観が多様化し業務が複雑になると、手段と目的の因果関係は不鮮明になり、本来の目的すら分からなくなることもあるだろう。

本学では7年に1度の大学認証評価を受害するにあたって今後本格的な作業に入っていくが、大学が自ら点検しその結果を自己評価する作業は全学を挙げた大きなエネルギーを伴うものとなってくる。

こうした自己点検・評価のプロセスを踏むことや、その評価結果を活用することは、今後のよりよい大学運営に繋がるものであると考えられることから、大学事務局としても目の前の評価報告書の作成作業や情報収集に追われることで、大学が果たすべき内部質保証という認証評価に込められた本来の意義や目的を見失うことのないよう自戒しながら取り組んで行くことが大切であると感じる日々である。

2013年度秋に文部科学省COC（「地（知）の拠点」）整備事業に本学の計画大学と地域の連携がおりなすCOC事業について続報として特集しました。

コミュニティケアの拠点づくりに向けた始動の年

相原 洋子（地域連携教育・研究センター 准教授）

1. 2年目を迎えたCOC事業と今後の展開

前号にあたる『回廊』第11号において、本学が平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備（COC）事業」に採択されたこと及びその事業概要についての記事が特集されました。2年目にあたる今年度は、まさに始動の年であったといえます。今回はその続報として、本格始動したCOC事業について報告します。COC事業ではこれまで本学が実施してきた「コラボ教育」を、学生が地域に出て住民に参加いただく内容とする科目を追加、学部1年から4年生まで継続的に導入するといったカリキュラムの変更を行いました。学生が地域に出向くことにより、「卒業生全員が地域住民の暮らしを理解できる」とことと「住民の方がコラボ教育に参加することにより、地域における健康づくりのリーダー育成の支援」という、本学COC事業の目標達成を狙いとしています。

しかし初めての地域で大学から出向いて行う授業というのは、これまで本学が築きあげてきた「コラボ教育」のノウハウをもって、すんなりと事が運ぶというものではありませんでした。COC事業では市内でも高齢化率の高い北須磨地区を対象としています。今回初めて学生を受け入れるにあたり、地区の行政関係者、民生委員さんはいろいろな不安を抱えてのスタートであったと思います。民生委員さんからは、「当初、本当に授業が成功するのか不安だった」という声も聴きました。とはいえ、おかげさまで初年度の北須磨地区でのコラボ教育には、延べ306人の住民の方が教育に参加くださいました。今年度は1、2年生開講の4科目の実施でしたが、来年度は3、4年生開講の3科目が新たに加わります。参加いただいた住民さんからは、「学生さんが優しく接してくれた、真剣に話を聴いてくれたことに感激した」、また「今後地域医療に関心を持てる看護師になってほしい」と期待を膨らませる声をいただきました。

た。学生の皆さんは、どのような感想を持ったでしょうか。将来看護師として働く中で「あの時の経験が役立った」と言える教育となつてほしいと願います。

2. 地域への愛着と関心が実を結ぶもの

先に述べたコラボ教育では、地域に出向く科目が1年生から導入されています。これは他の看護系大学と比べても早期から地域志向を目指したカリキュラムといえます。今年始動したCOC事業では、早いものでは1年生の前期（5月）に地域での授業が取り入れられました。早期に地域に出ることにより、地域に目を向ける機会も増えたのではないのでしょうか。さらにCOC事業が本格始動する前の平成25年度に実施したCOC事業に関する評価からも、興味深い結果が得られました。

この評価は平成26年1月に実施され、300人の学生（学部生、専攻科生、大学院生）から回答をいただきました。その中から健康生活支援学実習など地域で行う科目が始まる前の1、2年生113人を対象に分析を行いました。地域の保健医療の知識として、神戸市の「高齢化率」「保健医療施策の特徴」「保健医療福祉資源」について「知っている」という問いをし、自記式で「とてもあてはまる（3点）」～「全くあてはまらない（0点）」の回答の合計点をアウトカムとしました。神戸市への愛着・関心・ボランティア活動への関心や参加の有無、さらに本学が行っているまちの保健室の認識に関する回答を得点化したものを説明変数としました。結果は下の表に示すとおりです。

この結果の見方は、係数が正の値だと正の相関、負の値だと負の相関があることを示します。つまり神戸市への関心や愛着が高い人ほど、神戸市の高齢化や保健医療に関する知識が高いという解釈になります。また事象が偶然起こりうる確率（p値）で示しているように、その相関は統計学的に有意という結果が

表. 地域への関心・愛着、大学の地域貢献活動の認知度と保健医療知識（重回帰分析による）

	全体 (n = 113) 標準化係数 (SE)	1年生 (n = 63) 標準化係数 (SE)	2年生 (n = 50) 標準化係数 (SE)
地域への関心・愛着	0.32 (0.07) ***	0.20 (0.11)	0.45 (0.99) ***
大学の地域貢献活動認知度	0.25 (0.11) **	0.32 (0.15) **	0.06 (0.18)
神戸市居住年数	0.05 (0.10)	- 0.002 (0.14)	0.17 (0.14)
学年	0.09 (0.34)	—	—
調整済み R2	0.17 ***	0.12 *	0.26 **

* p 値 < 0.05, ** p 値 < 0.01, *** p 値 < 0.001

COC整備事業：続報

が採択され、初年度を過ぎ、今年度は多くの事業が本格的に実施されました。

得られました。横断調査なので因果関係が不明確であり、知識を自己評価しているといった限界を考慮する必要があります。しかしこの結果から、神戸市のことや大学が行っている地域貢献活動に目を向けることが、コミュニティケアの理解につながる一歩になるのではと考えました。2014年のノーベル平和賞受賞者のサティヤルティさんとマララさん両氏が語るように、

社会問題の解決は関心を持つことが大切です。学生の皆さんには、早期学年から開講されている神戸学やボランティア活動といった科目の受講を通して、まずは神戸市やボランティア活動について知ることから始めていただき、そして神戸市の健康課題解決にむけたアイデアの枝葉をたくさん広げていってほしいと思います。

官学民の協働の力で紡ぐ「安心のまちづくり」

～サテライトルーム開設で広がる可能性～

石井 久仁子（地域連携教育・研究センター 助教）

COC事業が本格的に始動し、北須磨地区においてコラボ教育やコミュニティ育成支援事業などさまざまな取組みがスタートしました。北須磨地区はS50年代に神戸市が開発したニュータウンですが、30～40年の時を経て住民の高齢化が進み、中には高齢化率40%を超える地区もあります。神戸市看護大学はCOC事業を通し、高齢化に伴う諸課題に対して「継続看護教育の強化」「訪問看護の教育強化」「多職種連携の充実と組織化」「地域コミュニティの育成支援」の4つの取り組みを行っています。本学はこれまで大学が立地する西区においてさまざまな事業を展開してきましたが、COC事業では須磨区にエリアを拡大し、従来の活動をさらに進化させながら事業を展開します。事業の開始にあたっては「地域との接点」をつくるのが大きな第一歩でしたが、地区の行政担当者や民生児童委員さんをはじめとする地域代表者のご助力によって活動環境が整いつつあります。また、そういった皆様との相談や打ち合わせでは、地域との調整にとどまらず、新たな発見や事業推進に向けたヒントを頂いています。H26年はこのように事業のスタートから「官学民の協働の力」や「連携・協働の可能性」について考えた1年でした。連携・協働の第一歩はお互いを知り認識することから始まりますが、住民・行政・大学が相互に抱える課題や取り組みを共有することで共通課題が見えると同時に、相互に補完できる事例や解決策がみえてきます。COC事業をきっかけに官学民の協働の力と可能性が広がるよう、今後も対話と検討を重ねていきたいと思います。

北須磨地区での活動にあたり、昨年9月には、学生の演習や実習、地域代表者や行政担当者との会議等の拠点として、北須磨地区の集合住宅群の一角にサテライトルームを開設しました（写真）。また、地域住民のネットワーク構築支援に向け、地域リーダーの育成支援の取り組みの検討も行っています。北須磨地区は神戸市内でも特に高齢化が高い地区ですが、60代前半

の方も多く居住しておられます。60歳代は仕事を中心とした生活から、家族や地域を中心とした生活へとライフステージが移行する時期であり、人生の熟成期です。そういった住民が、これまでの人生の中で醸成してこられた豊かな経験と能力を地域の中で活かしていただければ、地域の活性化やご本人の自己実現につながります。一方、仕事をリタイアされたばかりの方々からは「地域との関わりが少なく、活動したい気持ちはあってもきっかけが見出せない」という話をよく聞きます。本学COC事業では、サテライトルームを活用して、地域で活動する仲間づくりのきっかけにつながる支援ができるのではないかと考えています。一例として大学教員による人数限定の講座「地域ゼミナール（仮称）」が考えられます。地域ゼミナール（仮称）を通して、住民に仕事中心の時代には興味があってもできなかった学びや、これからの人生をより豊かにするようなテーマについて学んでいただき、その集まりが地域での新たな活動のきっかけになれば、地域に潜在する人的資源を活かすことができます。小さなサテライトルームですが、住民の多様な知識と能力、官学民の協働により、いろいろな可能性が広がります。小さな取り組み、小さな協働作業を重ねながら、「安心の街づくり」を紡いでいけるよう、取り組んでいきます。みなさまのご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



サテライトルーム開設式の様子（H26年9月26日）

定 年 記

植本 雅治（専門基礎科学領域・医科学分野 教授）

私は、本年度を以て、定年退職となります。本学に赴任したのは1999年、設立4年目でした。その頃という阪神淡路大震災の記憶も未だ生々しい頃でした。日常の生活はほぼ旧に復していましたが、あちこちに空き地が残り、街中にも、大学にもなんとなくですが緊張感がただよっていたような記憶があります。

私は、震災時には西神戸医療センターに在籍、直後よりメンタルヘルス面での支援や調査にかかわっていました。大きな被害を受け、心に傷を抱えた方も多くおられました。さらに、その人たちを救援、支援する中で自分自身が苦しくなってきた人たちもいました。ところが、そのような問題に対処するための知識は当初、ほとんど知られていませんでした。阪神淡路大震災が契機となり、災害後のメンタルヘルスに関心が高まり、PTSD（外傷後ストレス障害）などの病名も広く知られるようになったのです。

その後、本学へ赴任した年の9月、台湾で大きな地震が起きました。それまで神戸で協力して活動していた団体からの申し出もあり、台湾中部の埔里市での支援にかかわることになりました。その後約2年間にわたり、当時本学の助教であった鶏川晃さんや神戸大学の学生ボランティアの人たちと共に何度も現地を訪問、神戸での経験を生かし、支援に当たりました。この間、台湾でも、災害後のメンタルヘルスに関するキャンペー

ンが積極的に行われ、知識が普及し、行政的な組織も整備されていく過程を経験することができました。

2004年には、中越地震が起きました。関連する学会から派遣される形で現地に行き、学校や保育所で、教職員から相談を受けたり、親御さんたちに子どもたちに残りがちな影響についてお話しする機会を持つことができました。この頃には、教育機関や行政にはメンタルヘルスの必要性が認識されるようになっていましたが、具体的な活動についてはやはり手探り状態で進められていたように思います。

そして、2011年には東日本大震災が起こります。私自身は直接現地に赴く機会はありませんでしたが、支援に当たっている人たちと話し合う機会はしばしばあり、そこからは、精神的な問題へのケアが被災地のあちこちで、組織的、継続的に行われている様子が伺えます。ただし、被災範囲が広く、散在しているため、かかわっている人たちの苦労は並大抵ではないようです。またすべての必要性が満たされるというわけにもいかないでしょう。これからもお手伝いできることがあれば私や私の仲間たちも考えているところです。

以上、本学で過ごした期間を振り返ろうとして、災害関連のことばかり書いてしまいました。もちろん、もっとさまざまなことがあったのですが、私の中ではこの二つが特に深く重なっているようです。

「在外研修を終えて～米国サンフランシスコでのフィールドワーク報告」

藤井 ひろみ（ウィメンズヘルス看護・助産学分野 准教授）

米国では2015年6月に、最高裁により合衆国として同性結婚を認めるかどうかの判断が示される予定です。これに先駆け2013年には、結婚は男女の間だけのものと定めることは違憲であるとの判決が出されています。カリフォルニア州は州レベルで同性結婚をすでに認めています。そこで助産学を教えている私は、日本では学べない法的保障を得ている同性カップルが子どもをもつとはどういうことが、また同性親とその子どもや、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）への健康支援の実際を学ぶため、2014年8月から10月にかけての10週間、米国カリフォルニア州サンフランシスコで在外研修をおこないました。

研修受け入れ先であるサンフランシスコ州立大学は、学生3万人を擁する公立大学です。看護師、教員、ソーシャルワーカーなどを輩出し、地元に貢献しています。教員の地域貢献活動も盛んで、そういう点で本学と似ているように思います。大学や病院だけでなく、コミュニティに根差した活動を学びたかった私には、最適の大学でした。

エスニックスタディーズと社会学で教鞭をとられている日系米国人のAmy Sueyoshi先生と、小児看護の臨床経験が長く現在は健康教育を教えておられるMickey Eliason先生のスーパーバイズを受けながら、現地研究者・学生との交流をはじめ、LGBTへのインタビューや、NPOでのインターンなどをおこないました。

研修を通して実感したのは、いまや「同性カップルは当たり前」の米国では、看護や社会福祉分野で重要になっているのは、高齢LGBTや、性自認や性別表現を親に理解されずホームレスとなったトランスジェンダーの子ども達であること、そして虐待、性暴力、麻薬、性感染症（HIV）、精神疾患発症などのリスクが高い脆弱なグループの強力な支援者として、成人期のLGBTが多様なコミュニティ活動を展開していることでした。大学はもちろん、病院、市役所、警察、NPO、小学校、教会、ホテルやレストラン、スーパーなど、ありとあらゆる場に性的多様性を尊重するシグナルである虹色が掲示され、実際にいろいろな服装や性別不明の人、いろいろな家族背景の人が

の現場から

いました。

インタビューをさせていただいたMさんは、それまでも多様性が認められてはいたが、同性婚が認められてから状況が一変したと語っておられました。また、大学の実習病院を見学した際、ハードワークをこなす看護教員のJさんに、サンフランシスコで働いている魅力は？と聞くと、「この多様性！」とすぐに答が返ってきました。その一方で、サンフランシスコ市は人口約83万人、出生数は州の中では低く、子育て世代は地価高騰の著しい市内を避けて周辺の街へ移動する傾向があること、市民の平均所得は高く、給料も高いために、市内の病院へは全国から看護師や看護学生が集まり、サンフランシスコ州立大学看護学部の卒業生は、なかなか近隣の就職ができなくなっているとのことでした。子育て中のEさんは、地価高騰で友人が遠方へ次々と引っ越してしまい寂しいこと、多様性が当たり前になって逆にあえて活動するときには同じジェンダーや人種同士で集まる傾向が、特に若い世代にあることなどを、時代の流れとして受け入れながら、深い悲しみとして語られました。

このような環境の中で大学教員は、国や地域の歴史とその中で変化する人の思いを理解し、現在のコミュニティで生きるLGBTに寄り添う支援プログラムを立案・実施できる優れた実践者でありフィールドワーカーでした。また自らも多様性を感受し、多様性の体現者でもありました。写真は、隔週土曜日にサンフランシスコLGBTセンターで開催される健康教室「Doing It For Ourselves」でのEliason先生と筆者です。先生からは、ぜひ日本でもこうした教室を開催してほしいとエールをいただきました。実現に向け、現在奮闘中です。

最後になりましたが、在外研修に送り出してくださった大学に感謝しています。とりわけ、共に年中走るように仕事をしている助産師教員の支援がなければ、今回の在外研修は不可能でした。いつか恩返しをしたいという新たな目標を持ち、これからも走っていきたいと願っています。



Mickey Eliason先生と筆者
(サンフランシスコ州立大学にて)

シミュレーション看護教育に関する研究

船木 淳（療養生活看護学領域 急性期看護学分野・助教）

私が教育・研究者となり6年が経過しました。その前は高度救命救急センターで約10年働いており、ドクターヘリに医師とともに同乗し患者の受傷・発病現場に向かうフライトナースの経験もあります。そのため、教員になった時からフライトナースに関する研究にチャレンジする夢を抱いておりました。

そして、5年前私は「シミュレーション教育」に出会いました。シミュレーション教育とは「実際の臨床の場や患者などを再現した学習環境の中で、学習者が医療行為やケアを経験し、その経験を学習者が振り返ることによって、専門的な知識・技術・態度の統合を図る教育（学習）」をいいます。フライトナースは実際に現場に出ると看護職としては1人で活動しなければならず、自らの看護について省察を繰り返しながら実践知を磨いています。そのような状況を踏まえ、フライトナースの育成にシミュレーション教育を導入し研究を進めることができないかと考えました。そして4年前に「フライトナースのシミュレーション看護教育プログラム開発に関する研究」というテーマで科学研究費助成事業に応募し研究費を獲得することができました。

シミュレーション教育では学習目標を明確にする必要があります。現在はフライトナースの看護実践場面を想定した約50項目の学習目標を抽出し、全国のフライトナース（約400人）を対象に学習ニーズに関する調査を行う段階です。その後、学習ニーズが高かった項目に焦点をあてたフライトナースの看護実践場面を再現しながらシミュレーション看護教育プログラム

の効果について検証していく予定です。

調査協力いただくフライトナースへの謝礼品を考えていた時に、実習で担当した学生が上手にイラストを描いて患者さん・家族へ退院指導を行っていたのを思い出し、学生にフライトナースに関するイラストの作成をお願いしました。研究協力依頼時に学生がデザインしたイラスト（下に掲載）をクリアファイルにし、全国のフライトナースに配布しています。クリアファイルが全国で活用されていることも嬉しいことです。

本学においても実習室やシミュレータを整備しシミュレーション教育を徐々に導入してきています。今後は、シミュレーション教育を実施する側（教員）の教育力の観点から研究を進めていきたいと考えています。



デザイン 2014年度卒業生 酒井 菜々 さん

在学生から

自分にできること

島谷 奎汐（学部2年）

私は神戸市看護大学の地域防災ボランティア団体SCHOPで2年間活動してきました。現在はSCHOPの代表を務めており、様々な活動にメンバーのみんなと取り組んでいます。

SCHOPは2015年度で設立3年目になる団体で主な活動は、大学周辺の地域のイベントや防災活動への参加と東北でのボランティア活動をしています。また、他大学の学生との交流や協働も積極的に行っており、イベントの協働開催や学生主催のイベントへの参加、全国公立大学学生大会への参加等を行っています。

私は大学に入学するまではボランティア活動をしたことがなく、自分からボランティア活動をしたいと強く思っていたわけではありませんでした。しかし、1年生の春に新しく団体を作るので入ってみたいかと先輩から誘っていただき、団体へ参加しました。この2年間SCHOPで多くの活動をしていく中でボランティア活動の楽しさと大切さを知り、一生懸命に取り組むようになりました。しかし、それと同時にボランティアの難しさというのを感じるようになり、自分がしていることは自己満足なのではないかと悩んだことやボランティア活動とは何なのかということもたくさん考えました。しかし、自分なりの答えを見つけるということはできませんでした。だからこそ、今もメンバーと一緒に考え、全力で活動に取り組む日々が続いています。

私はこの2年間の活動で多くのことを学び、感じました。東北での活動は、私にとってかけがえのないものでした。震災の恐怖や故郷を失ってしまう悲しみを知ると同時に、たくさんの人の温かさや地域のコミュニティの大切さを学びました。また、他大学の学生と協働することで、他大学で活動している自分と同じ志を持つ仲間に出会うこともできました。私は、このような出会いや学びの場があることに感謝し、大学や地域での活動へと還元していきたいと考えています。

学生という限られた時間の中でできることは、それほど多くはないと思います。だからこそ、自分にできることを考え、全力で取り組むことが大切だと思っています。

私は、今までのすべての出会いに感謝してこれからもメンバーと共に活動していきたいと思っています。どうぞ、応援よろしくお願い致します。



筆者（右から2人目）とSCHOPの仲間達
（全国公立大学学生大会・兵庫県立大学にて）

海外研修報告 シアトルでの生活を通して

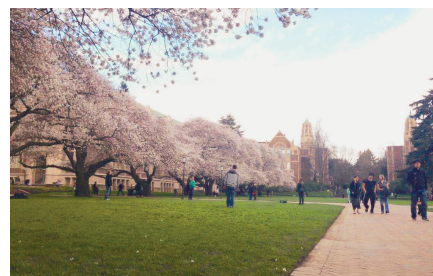
岡村 優美（学部編入生4年）

シアトルへ行った時期は、ワシントン大学の中庭に植わっている桜がちょうど満開で、とても綺麗な景色が見られる季節でした。平日はワシントン大学で講義を受け、病院や施設を見学し、休日は観光や買い物を楽しんだ、とても充実した2週間でした。ワシントン大学では、アメリカの看護制度や翌日に見学する予定の病院、施設について学習したり、アメリカの食文化について実際に食べて学んだり、医療だけでなくアメリカの文化について学ぶことができました。そして病院見学では、手術のシミュレーションができる機械を実際に操作したり、病院が行なっている取り組みについての話を聞いたり、その病院における医療の実践について学ぶことができました。また、日本のような皆保険制度がないアメリカにおいて、町の診療所であるカントリードクターへも行くことで、アメリカでの医療の現状を学ぶことができました。日本で事前にアメリカの医療や文化について調べて行きましたが、実際に現地の人の思いやそこで行われていることを見たり聞いたりすることで、より理解を深めることができたと思います。

ホームステイでは、ホストファミリーに暖かく迎えられ、食事をしたり、テレビを見ながら談笑したり、休日には一緒にアウトレットへ行き買い物を楽しむなど、家族のように接してもらいました。英語が少ししか話せなくても、楽しみながら英語

に浸ることができました。また、同じようにホームステイしていた中国人留学生とも仲良くなったことはとても貴重な経験もでき、アメリカでの生活を楽しむことができました。放課後や休日には研修と一緒に参加していた友達とダウンタウンへ遊びに行き、スターバックス1号店やマーケット、スーパーニアショップでの買い物、アメリカならではのボリュームのある食事を楽しむことができました。

2週間という短い間でしたが、ホームステイ、多くの人との交流、バスに乗っての通学、病院や施設の見学、放課後に行った友達との買い物など、アメリカでの一つ一つの貴重な経験が自分の視野を広げ、自分を大きく成長させてくれたと思います。



桜の咲き誇るワシントン大学構内（シアトル市内）

卒業生から

様々な対象者と関わる保健師として働く中で

町田 佳奈美（学部13回卒業生）

西宮市保健所 地域保健課（中央保健福祉センター）

平成24年度に神戸市看護大学を卒業し、西宮市の保健師として働き始め約2年が経過しました。保健師の分散配置が進んでおり、私が働いている西宮市役所でも様々な部署で保健師が活動しています。その中で私は、乳幼児健診や健康教育などの保健衛生部門を担当する部署で働いています。また、地域や家族の抱える健康課題が複雑・困難化しており、ひとつの分野だけではなく横断的・包括的な関わりが必要な問題もあります。そのため、私の働く部署では地区担当制を取り入れており、担当地区に住む方々の様々な健康相談に対応しながら活動しています。母子保健分野だけでなく成人保健や精神保健分野等幅広い分野の知識と対応が求められており、学習の日々です。

例えば、精神保健に関する相談では、他分野とは異なり本人だけでなく家族や近隣の方からの相談を受けることがあります。その際、対象者と相談者の思いが異なっている時や他機関との連携をとる必要があるとき等、なかなか解決の糸口がつかめず苦慮することもあります。また、母子保健で母親と関わると、実は既往歴に精神疾患があったり、家族の中に精神疾患を抱えている人がいたりする場合などもあります。このような

場合、母子保健分野以外の知識や対応が必要になる場合もあり、幅広いスキルが求められます。

このように様々な視点を持ち、活動することが求められていますが、私が日々活動を行う中で大切にしていることがあります。それは、目の前の問題だけでなく、相談者が望む生活はどのようなものなのか、相談者にとって一番よい支援は何か等、様々な視点を持ち、考えながら関わることです。関わる対象者や相談内容は様々ですが、相手の話を聞き、相手の考えを尊重するという個別支援の大切さは、大学で学習したようにとても重要だと感じています。気軽に相談できる存在であり、相談者に寄り添う保健師になれるよう、これからも日々頑張っていきたいと思います。



大学の1年間

行事 *****

2014年 4月7日	入学式
4月9日	定期健康診断
8月2日～3日	オープンキャンパス
8月8日	助産学専攻科特別講演会「お母さんがお母さんになったとき」
8月28日	大学院博士前期・後期課程入学試験（9月3日合格発表）
9月5日	編入学試験（9月17日合格発表）
10月10日	大学院特別講義「医療における攻撃性とリスクマネジメント」
10月11日	助産学専攻科入学試験（10月23日合格発表）
11月3日	看護専門職公開講座「はじめよう エンド・オブ・ライフケア」
11月13日	特別講演会「「多様性」の可能性と畏」
11月15日	あざみ祭
11月22日	推薦入学試験（12月4日合格発表）
11月24日	大学院特別講演会「Research Ethics : Discussing Strategies for Nursing Science」
2015年 1月17日～18日	大学入試センター試験
2月21日	第16回国際フォーラム「認知症をもつ在宅高齢者と家族への支援のための協働：イギリスにおけるエビデンス」
2月25日	一般選抜入学試験前期日程（3月6日合格発表）
3月7日	大学院オープンキャンパス
3月12日	一般選抜入学試験後期日程（3月20日合格発表）
3月18日	卒業式

人 事

教 員

退 職

2014年	3月31日	服部 兼 敏	教 授
	3月31日	沼本 和 子	教 授
	3月31日	成瀬 和 子	准 教 授
	3月31日	岩本 里 織	准 教 授
	3月31日	川上 由 香	講 師
	3月31日	菊地 慶 子	助 教
	3月31日	中 島 友 美	助 教

採 用

2013年	10月1日	平田 恭 子	助 教
2014年	2月1日	相原 洋 子	准 教 授
	4月1日	河井 伸 子	准 教 授
	4月1日	赤田 いづみ	助 教
	4月1日	秋定 真 有	助 教
	4月1日	石井 久仁子	助 教
	4月1日	蒲池 あずさ	助 教
	4月1日	加利川 真 理 子	助 教
	4月1日	藤 本 優 子	助 教

昇 任

2013年	10月1日	丹野 恵 一	講 師
2014年	4月1日	坪井 桂 子	教 授
	4月1日	藤代 節 子	教 授
	4月1日	嶋澤 恭 子	准 教 授
	4月1日	宇多 みどり	講 師
	4月1日	清 水 昌 美	講 師

職 員

退 職

2014年	3月31日	田村 佳 彦	総務課長
	3月31日	末 久 秋 美	事務職員

転 入

2014年	4月1日	橋倉 正 司	総務課長
	4月1日	神澤 光 一	庶務係長
	4月1日	伊形 啓 一	学務係長
	4月23日	大 寺 雅 子	事務職員

転 出

2014年	4月1日	平井 清 隆	庶務係長
	4月1日	西 川 祥 子	学務係長

平成 25 年度国家試験合格状況

	保健師	看護師	助産師
受験者数	85 名	76 名	13 名
合格者数	80 名	76 名	12 名
合 格 率	94.1%	100%	92.3%

平成 25 年度学部卒業生・大学院修了生

学 部 卒 業 生	87 名
助産学専攻科修了生	13 名
大学院修士課程修了生	10 名
大学院博士課程修了生	2 名

平成 26 年度入学生

学 部 1 年 次	95 名
学 部 3 年 次 編 入	8 名
大 学 院 修 士 課 程	20 名
大 学 院 博 士 課 程	4 名
助 産 学 専 攻 科	15 名

オープンキャンパス 予告

2015年度のオープンキャンパスは2015年8月8日(土)、9日(日)に実施予定です。本学入学をお考えの方をご存じでしたらどうぞお声をおかけ下さい。詳細は順次本学HPなどに掲載いたします。

編集後記

『回廊』12号をお届けいたします。この1月17日で、阪神淡路大震災から20年が過ぎました。本学は、震災からおよそ1年後の1996年4月に、これからの医療における看護学に期待を寄せて下さった神戸市民の気持ちを受けて開学いたしました。開学19年になり、地域に受け入れられ、在学生も卒業生も様々な活躍の場を広げ、学内外での研究活動も活発に発展を続けております。そのような様子の一端を今号でご覧いただけたら幸いです。これからも世界中どこにいても神戸での学びの原点に立ち返る卒業生等の思いや震災を乗り越えて時を重ねる地域の人々の思いが交差する回廊を大切に守って行きたいと思ひます。(広報委員会)

神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地
電話：078 (794) 8080 (代表) FAX：078 (794) 8086
E-mail：soumuka@tr.kobe-ccn.ac.jp Web：http://www.kobe-ccn.ac.jp